

## 昭和47年度体育会

### 各部、同好会活動報告

#### クラブ紹介 その他



#### 野球場 員会会育村更辛84

野球場の歴史は古く、昭和47年度体育会各部、同好会活動報告のクラブ紹介 野球場 員会会育村更辛84

## 野球部



### クラブ紹介

#### 主将 小早川規好

我が野球部が所属している連盟は、東京新大学野球連盟である。連盟自体は日本学生野球連盟が定めた東京における公認リーグ、即ちそのリーグでの優勝校が全国大会への出場権を得るところの一つである。他の公認リーグは皆さんご存知の東京六大学・東都・首都リーグである。現在我が部は東京新大学リーグの一部である。一部には学芸大・商船大・工学院大・高千穂商大・日大農獣医と我が部の6校が所属している。

次に我が部では、小金井グラウンドで週3日程度の練習を行なっている。46年度の春季リーグでは、念願の一部優勝を果たし、全日本大学野球選手権大会に初出場したが1回戦で広島商大に2対5で敗れた。そして、秋季リーグ以降3シーズン連続3位に甘んじている。しかし、部員一同は一部優勝・全国大会出場を目指して個人個人が努力している。

ここで我が部の人員はマネージャーを含め16人という状態であって、最近の大学運動部の例にもれず人数が足らず苦勞している。部員には野球経験者は余り多くなく、大学に入って野球を始めたものが半数近くいる。我々は本当に野球が好きなる人を望んでいる。野球をやってみようという人があったら、進んで部の門をたたいてほしい。但し、我が部のように限られた練習時間、そしてコーチもいないチームでは自分からやろうという意志がなければ、絶対上達しないという事をつけ加えておきたい。

### 活動報告

春季合宿(4月1日~4月13日) 於:小金井クラブハウス

13名参加、春季リーグを目指して基礎体力及び実戦力養成。

東京新大学野球連盟

春季リーグ戦(4月28日~5月31日)

一部 学芸大 3 - ④ 電機大 (於神宮第二)

40 - 7 " (於駒沢)

"	③	-	2	"	(於 商船大)
日本農獣医	5	-	5	"	(於 駒沢)
"	⑥	-	4	"	( " )
"	1	-	⑧	"	( " )
"	⑧	-	5	"	(於 商船大)
商船大	0	-	②	"	(於 神宮第二)
"	0	-	⑨	"	(於 商船大)
工学院大	0	-	⑩	電機大	(於 神宮第二)
"	5	-	⑧	"	(於 商船大)
電通大	3	-	⑬	"	(於 電通大)
"	2	-	⑬	"	( " )

この結果、勝点3となり一部3位。

夏季合宿(8月20日~26日)

群馬県猿ヶ京 16名参加

秋季リーグを指し基礎体力及び実戦力養成。

秋季リーグ戦(10月12日~25日)

一部	工学院大	2	-	⑧	電機大	(於 駒沢)
	商船大	2	-	⑦	"	(於 神宮第二)
	学芸大	④	-	1	"	(於 成学園)
	高千穂商大	0	-	1	"	( " )
	日大農獣医	⑧	-	0	"	(於 商船大)

この結果、勝点3となり3位。

## “主将として感じたこと”

### 3D 浅見達雄

今シーズンを振り返り、四番打者として全く打てなかったことを申し訳ないと思っている。自分なりに努力したつもりだったが、やはりまだ甘かったのかもしれない。

今秋をもっていよいよ主将の立場を譲り渡す時がきたが、この一年半主将として何をやったのかと問われると返答に困ってしまう。しかし、私は私なりの信念をもってチームづくりをしてきたつもりである。秋季リーグでは、打撃面は以前より落ちたかもしれないが、守備面は数段よくなったと思う。野球の基本である守備がしっかりしていれば、そんなに打たなくても以外と勝てるものである。打撃はその日の調子によってムラがあるが、守備はそうではない。練習の成果がそのまま出てくるからである。

主将をやってきて一番痛感したことは、野球は基礎的な練習がいかに重要であるかということである。私たちはほとんどもとするとカッコイイ高度のプレー、テクニックを使いたがるものだが、それは基礎がしっかりしておれば、おのずと出来るものである。練習をみていると、基礎がほとんどできていなかった。例えば、キャッチボールである。皆の中には単なる肩ならし程度としか思っていない者がいるのではないだろうか。それは、野球の基礎の内でも最も重要なものでそれはちょうど家を造るときの土台のようなものである。土台がしっかりしていなければ家は不安定なものとなる。キャッチボールがしっかり出来ていなければ、すべてのプレーに影響してくる。打球がしっかりしていれば、連継プレー、ダブルプレー等は難なくできるだろう。又トスにしても打撃の前のウォーミングアップではない。打撃の基礎であるミート打法を習得す

るのに恰好のものである。打撃のよい人はトスにおいて打球がすべて投手に帰るが、これはミートが上手だからこそ出来ることであって、バントにおいてもミートのうまい人は難なくこなしている。それと同時に守っている方も守備のよい練習となる。我がチームのように練習時間の少ないところは、そのような基礎を忠実にやるのが重要であると思う。次代の幹部になる者も、基本的な練習をバカにせずに行ってほしい。

## “ふり返ってみるのもいいさ”

### 3D 富岡芳和

秋季リーグ戦をふり返ってみると、あの5試合という短い決戦の中にいろんなことがあったように思う。成績としては3勝2敗と、一応Aクラスにとどまったものの、もうひとつ大きな壁を破ることができなかった。それは、学芸であり、日大でもある。今後、これらの壁を打ち破ってこそ優勝があると思われる。その対策については、それぞれ皆心得ていると思うので記す必要もないだろう。またチーム自体ここ数年来、いろいろ変わってきたと思う。以前は打撃のチームであったように思う。そして今はどちらかというと守る野球に変わりつつあるように思われる。確かに今シーズンはエラーも、ほんのわずかなものであった。このことは我々が以前から目標としていた『守備面の強化』が一応成功したと思われる。しかし、その反面打撃の破壊力というものの低下が目立つようになった。だから、今後我々のチームの課題は、片一方にかたよらず全面的な強化に心がけなければならないことになる。

最後に自分自身のことについて記すと、今季は自分としては不本意な成績だったと思う。防犯率も秋季リーグ戦にしては悪かったし、調子の波というのが大きかった。これは、ピッチャーが一人であるということのつらさもあるが、3年間投げていて、ついにリーグ戦中すべての試合に調子よくというわけにはいかなかった。また、その体調を整えるすべも見つけることができなかった。このことが残念でならない。もう、来季からは新チームが主体となると思うが我々の時代の欠点はさて、よきものは残し、どんどんと自分たちで進むべき道を切り開いてくれることを祈る。